
トーマス・マン『ヴァイマルのロッテ (*Lotte in Weimar*)』(1939)における中国像

高辻 正久

1. はじめに

トーマス・マン (Thomas Mann, 1875-1955) の長編小説『ヴァイマルのロッテ (*Lotte in Weimar*)』(1939) は、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832) の書簡体小説『若きヴェルテルの悩み (*Die Leiden des jungen Werthers*)』(1774) のロッテのモデルと見なされているシャルロッテ・ケストナー (Charlotte Kestner, 1753-1828) とゲーテとのヴァイマルにおける44年ぶりの再会を描いた物語である。ナチス政権が成立した1933年からスイスに亡命していたマンは、3年後の1936年2月にナチス政権に対する批判を公に表明¹⁾、同年12月にナチスからドイツ国籍を剥奪される前月の11月に『ヴァイマルのロッテ』を書き始める。その後、マンは1938年にアメリカに移住し、翌年の1939年9月にドイツのポーランド侵攻によって第二次世界大戦(1939～1945年)が始まった翌月の10月にこの作品を書き終えた。

『ヴァイマルのロッテ』の物語の舞台は1816年秋のヴァイマルであるが、主要な登場人物であるゲーテとシャルロッテが中国・中国人について言及したり考える場面がいくつかある。しかもそれらの場面は、ゲーテとシャルロッテが44年ぶりに再会するこの作品のクライマックスともいえる第8章に集中している。『ヴァイマルのロッテ』以前に発表されたマンの作品では、たとえば1920年代前半に発表された長編小説『魔の山 (*Der Zauberberg*)』(1924) やエッセイ『ゲーテとトルストイ (*Goethe und Tolstoi*)』(1925) においても、中国・中国人に関する記述がいくつか見られた。しかし、それ以降はこの『ヴァイマルのロッテ』発表までの約15年間、中国・中国人に関する記述はマンの作品においてほとんど見られない。また、『ヴァイマルのロッテ』において描かれている中国像は、1920年代前半に発表された『魔の山』や『ゲーテとトルストイ』における中国像とは様相が変わっている。たとえば、『ヴァイマルのロッテ』における中国・中

1) 山口 (1991: 172-175) を参照。

国人に関する記述には、それ以前に発表されたマンの作品において何度か見られた老子の思想など中国文化に関するものが見られない。また、この作品には、主人公のシャルロッテが中国人について「奇妙な考え方をする民族」²⁾と言う場面があるなど、それ以前に発表されたマンの作品における中国像と比べて、その異質性が強調されている。

マンは『ヴァイマルのロッテ』において、なぜ主要な登場人物であるゲーテとシャルロッテに、中国・中国人について語らせたり考えさせたのだろうか。1924年発表の『魔の山』以来、約15年ぶりにマンが小説において中国・中国人を描き、またそれらの様相が変わった要因は、『ヴァイマルのロッテ』を執筆した1930年代後半という時代と関係しているのだろうか。この時期のドイツは、ラインラント進駐(1936年)や日独伊防共協定(1937年)、またオーストリア併合(1938年)等を経て第二次世界大戦へと至った時代だった。一方、この時期の中国は、軍国主義化する日本の侵略に脅かされていて、ついに日中戦争(1937～1945年)へと至った時代であり、マンは日中戦争の戦況について何度か日記に書き留めている。

『ヴァイマルのロッテ』における中国像に関する先行研究を見ると、ギュンター・デボン(Günther Debon)は、作中の登場人物であるゲーテが中国・中国人に言及している台詞を取り挙げて、その内容を実際の中国の歴史・文化、たとえば科挙制度や儒教・道教思想などと比較し、さらにその出所をゲーテやマンの著作等によって確認している³⁾。それによって、この作品におけるゲーテの中国・中国人に関する台詞の由来がある程度明らかになり、また当時のマンの中国像も垣間見ることができるようになった。

本稿では、デボンの行った『ヴァイマルのロッテ』におけるゲーテの中国・中国人への言及の分析に加え、この作品の主人公であるシャルロッテの中国・中国人に対するイメージも分析したい。すでに確固たる立ち位置を確立した作中のゲーテよりも、いまだ悩み葛藤するシャルロッテには、ゲーテ像に投影しきれなかったマン自身のより現実に近い姿が映し出されているという指摘もある⁴⁾。した

2) Mann(2003: 442). 日本語訳は望月(1971下: 318)。

3) Vgl. Debon(1990: 156-165)。

4) 伊藤(2014: 81-84)を参照。

がって、『ヴァイマルのロッテ』における中国像を通じて当時のマンの中国像を把握するためには、シャルロッテの抱く中国像も考察する必要があるだろう。また、『ヴァイマルのロッテ』以前に発表されたマンの作品における中国像とも比較して、その相違点を考察したい。さらに、マンがこの作品を執筆した時期である1930年代後半という時代との関連について、マンの日記を手がかりにして調べる。そして、これらの考察によって、マンの『ヴァイマルのロッテ』において描かれている中国像の特徴をより明確にし、またその特徴がこの作品の執筆された1930年代後半という時代とどのような関連があるのか探りたい。

2. ヨーロッパにおけるシノワズリー（中国趣味）の流行とゲーテの中国像

2.1. 17～18世紀ヨーロッパにおけるシノワズリー（中国趣味）の流行

まず、『ヴァイマルのロッテ』の物語の舞台である19世紀初頭の時代背景と実際のゲーテの中国像について確認したい。19世紀初頭ドイツにおいて、当時のドイツ人の中国に対するイメージに影響を与えた可能性のあるものとして、何が考えられるだろうか。それは、17世紀から18世紀のヨーロッパにおいて、王侯貴族が中国の磁器を集めたり、職人が中国風の家具を製作したり、画家が中国を意識した作品を描いたりしたシノワズリー（中国趣味）と呼ばれる文化現象がまず挙げられるだろう。シノワズリー（Chinoiserie）という言葉は、苛酷な日常生活からの逃避の場、余暇と豪華の避難場としての中国という、当時のヨーロッパ人の中国観を表わしている⁵⁾。この時期のヨーロッパ人は、芸術における古典的伝統の因習、すなわち「ギリシア的な優美と均整」に飽きて、中国陶器が備えているような「面白味のある変則的なもの」にあこがれたという⁶⁾。実際、17世紀から18世紀のヨーロッパでは、調和と均整を尊重したルネサンス美術に代わって、豪華絢爛な装飾を特徴とするバロック美術や、優美で繊細な装飾を特徴とするロココ美術が流行していた。また、17世紀にイギリスやオランダ、フランスが東インド会社を設立し、東洋の産物、とりわけ質の高い磁器や漆器を大量にヨーロッパ

5) ラック (1987: 52-53) を参照。

6) ドーソン (1971: 167) を参照。

にもたらして、王侯貴族たちに大きな刺激を与えたこともシノワズリーが流行する大きな要因だったと言われている⁷⁾。シノワズリーは美術・工芸だけではなく、文学・演劇にも影響を及ぼし、たとえばヴォルテール (Voltaire, 1694-1778) の戯曲『中国の孤児 (*L'Orphelin de la Chine*)』(1755) 等の作品が生まれている⁸⁾。

ドイツにおけるシノワズリーの影響を受けた文化遺産には、たとえば初代プロイセン王フリードリヒ一世 (Friedrich I., 1657-1713) が 1699 年に建てたベルリンのシャルロッテンブルク宮殿 (Schloss Charlottenburg) の「磁器の間」や、フリードリヒ二世 (Friedrich II., 1712-1786) が 1745～1747 年に建てたポツダムのサンソーシ宮殿 (Schloss Sanssouci) の中国茶館等がある。また、ザクセン選帝侯フリードリヒ・アウグスト一世 (Friedrich August I., 1670-1733) は、当時ヨーロッパ有数の中国の磁器のコレクターで、マイセン磁器を作らせることになった。シノワズリーは、19 世紀初頭にはブームを終えたが、影響力はその後も残存し続けたと言われている⁹⁾。

2.2. エッカーマン『ゲーテとの対話』における老年期のゲーテの中国像

18 世紀半ばから 19 世紀初頭にかけて生きたヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ (1749-1832) は、シノワズリーに接する機会が多かったと思われる。ゲーテの自伝『詩と真実 (*Aus meinem Leben. Dichtung und Wahrheit*)』(1811～1833) を見ると、ライプツィヒ大学で学んでいた頃に、ゲーテが家の唐草模様の鏡枠や中国の壁掛けを非難したために、父ヨハン・カスパー・ゲーテ (Johann Caspar Goethe, 1710-1782) を怒らせてしまったという記述がある¹⁰⁾。このとき彼が、中国の壁掛け等をどのように非難したのか具体的には書かれていないが、若い頃のゲーテは父とは違って、シノワズリーに対してあまり良い印象を持っていなかったように思われる。しかしゲーテは、最晩年には中国人の自然観や中国文学を礼賛したと指摘されている¹¹⁾。たとえば、ヨハン・ペーター・エッカーマン (Johann

7) 東田 (2015: 20) を参照。

8) ドーソン (1971: 183-185) を参照。

9) 東田 (2015: 22-24) を参照。

10) Vgl. Goethe (1985: 384).

11) ラック (1987: 76) を参照。

Peter Eckermann, 1792-1854) による『ゲーテとの対話 (Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens)』(1836～1848)を見ると、1827年1月31日のエッカーマンとの対話において、77歳のゲーテは当時読んでいた中国の小説を称賛している。この小説は、おそらく明末ないし清朝の小説『花箋』の英訳本であると言われている¹²⁾。『花箋』は、有為な青年と美しく礼儀正しい少女との恋愛小説で、彼らが花箋という花柄や模様のある便箋を用いて愛の詩を交換し、相思相愛になるという物語である¹³⁾。この小説について、ゲーテは次のように意見を述べている。

「人間の考え方やふるまい方や感じ方は、われわれとほとんど変わらないから、すぐにもう自分も彼ら〔中国人〕と同じ人間だということが感じられてくる。ただ違う点は、彼らの間では、すべてがいつそう明快で、清潔で、道徳的にいっていることだ。彼らの間では、すべてが、理性的、市民的であり、はげしい情熱とか詩的高揚は見あたらない。だから、私の『ヘルマンとドロテア』や、イギリスのリチャードソンの小説と似かよった点が多いね。しかし、もう一つ違っているのは、彼らの世界では、人間あるところ、つねに外的自然が共存していることだ」¹⁴⁾ (括弧内筆者)

ゲーテは、自分たちドイツ人が中国人と同じ人間だと感じ、また中国の小説『花箋』が自身の叙事詩『ヘルマンとドロテア (Hermann und Dorothea)』(1797)と似通っていると言うのだ。しかも、ゲーテが中国人の特徴として挙げている「明快さ」や「理性的」、「道徳的」というイメージは、「面白味のある変則的なものへのあこがれ」というシノワズリーの性格とは異なっている。そしてゲーテは続けて、「万事につけてこういう厳格な中庸の精神があったからこそ、シナという国家が数千年にわたって維持されてきたのだし、これからも長く存在していくだろう」¹⁵⁾と中国を称賛し、さらに「シナには、この程度の小説は何千となくある」¹⁶⁾

12) 福田 (1981b: 119-122) を参照。

13) 福田 (1981a: 8-9) を参照。

14) Eckermann (1986: 205). 日本語訳は山下 (2012 上: 349)。

15) Eckermann (1986: 206). 日本語訳は山下 (2012 上: 350)。

16) Eckermann (1986: 206). 日本語訳は山下 (2012 上: 351)。

とも言う。ただし、ゲーテがここで中国を称賛しているきっかけは中国の小説であり、シノワズリーの主な対象であった中国の美術・工芸品ではない。

この他に、エッカーマン『ゲーテとの対話』におけるゲーテの中国・中国人への言及を見ると、1823年4月26日のフレデリック・ソレ (Frédéric Soret, 1795-1865) との対話において、73歳のゲーテは次のように言っている。

「大公の図書館には」とゲーテはその折にいった、「カール五世治下のあるスペイン人の手で作成された地球儀がある。それに二、三の珍しい銘が書き入れられているよ。たとえばこうだ、『シナ人は、ドイツ人とひじょうに類似した民族である』とね」¹⁷⁾

ゲーテは「シナ人は、ドイツ人とひじょうに類似した民族である」という銘について、ここでは何も意見を述べていない。したがって、彼がこの銘に納得したという可能性も考えられる。エッカーマン『ゲーテとの対話』における老年期のゲーテの中国像の特徴は、ドイツ人と中国人との類似性を見いだしている点にあるように思われる。

3. 『ヴァイマルのロッテ (Lotte in Weimar)』 (1939) における中国・中国人に関する記述

3.1. 『ヴァイマルのロッテ』におけるゲーテとシャルロッテの中国像

1939年に発表されたトーマス・マンの長編小説『ヴァイマルのロッテ (Lotte in Weimar)』に描かれている中国像には、上述のシノワズリーにおける中国のイメージや実際のゲーテの中国像が反映されているだろうか。この作品に描かれているゲーテは67歳で、エッカーマン『ゲーテとの対話』における実際のゲーテと同様に老年期である。『ヴァイマルのロッテ』における中国・中国人に関する記述を、シノワズリーにおける中国のイメージや実際のゲーテの中国像と比較しながら見ていきたい。

『ヴァイマルのロッテ』のあらすじを簡単に述べると、以下の通りとなる。1816年9月22日に当時63歳の宮中顧問官未亡人シャルロッテ・ケストナーが、

17) Eckermann (1986: 478-479). 日本語訳は山下 (2012 下: 31)。

妹のリーデル御料局顧問官夫人を訪ねる目的で娘と一緒にヴァイマルに来て、止宿する旅館からゲーテ宛に会いたいという旨の手紙を書く。その日にシャルロッテが旅館でゲーテの秘書をしているフリードリヒ・ウィルヘルム・リーマー等の訪問を受けたあと、ゲーテの息子アウグストが彼女の手紙を受け取った父のこづけを伝えるために訪ねてくる。そして、シャルロッテはゲーテの家で催される9月25日の午餐会に娘とリーデル夫妻とともに出席することになり、当時67歳のゲーテと44年ぶりに再会するという内容である。

この作品において、最初に中国・中国人についての言及があるのは、シャルロッテがゲーテと再会する第8章の会食の場面である。ゲーテは招待客たちの前で、中国人の特性について話す。

大公の図書室に古い地球儀があるが、それにはたびたび目を見はらせるような題句で地球上のさまざまな民族の特性が簡潔に書かれていて、ドイツ人については、「ドイツ人はシナ人と似たところの多い民族である」と書かれている。これは実に愉快的な比較であって、ドイツ人の称号狂と救いがたい学者尊敬とを考え合わせると、適切な比較ではあるまいか。もちろん、このような民族心理学的な寸言には、常にどちらとも言える点があって、シナ人との比較はフランス人の場合にも同様に、あるいはもっとぴったりとするだろう。フランス人の文化的な自負心と官人的な厳格な試験制度とはきわめてシナ的である。そしてまた、フランス人は民主主義者でもあって、その点でもシナ人に似ている。もっとも、フランス人は民主主義的な考え方の過激さにおいてはシナ人に遠くおよばない。孔子を生んだ国の人々は「偉大な人物は社会の禍である」という言葉を発明している¹⁸⁾。

まず、地球儀に「ドイツ人はシナ人と似たところの多い民族である」と書かれているとゲーテが言う箇所は、上述のエッカーマン『ゲーテとの対話』における1823年4月26日のソレとの対話に由来すると指摘されている¹⁹⁾。そして、フランスにおける厳格な試験制度を中国と類似する点として挙げているのは、当時の清朝における官僚登用試験の科挙をイメージしてのことだろう。科挙制度は、隋の

18) Mann (2003: 411). 日本語訳は望月 (1971 下: 277)。

19) Vgl. Debon (1990: 157).

文帝時代から清朝末の1905年まで1300年以上続いた試験制度だが、16世紀以来ヨーロッパのキリスト教徒や知識人たちに注目され、フランスやイギリスの試験制度に影響を与えたと言われている²⁰⁾。

また、ゲーテは「フランス人は民主主義者でもあって、その点でもシナ人に似ている」と述べているが、当時の清朝は「文字の獄」という言論・思想弾圧や成人男性への辮髪の強制などを行っていて、民主主義とはまったく異なる政治体制であった。したがって、ゲーテが中国人を民主主義的だと考える理由は、中国の政治体制にあるのではなく、「偉大な人物は社会の禍である」という中国の諺に基づいているものと考えざるを得ない。ただし、デボンはこの諺について、実際の中国の諺のなかからは見つけられなかったと述べている²¹⁾。この諺は、フリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチェ (Friedrich Wilhelm Nietzsche, 1844-1900) の『遺された断想 (*Nachgelassene Fragmente*)』において1881年の秋に書かれた文章「すべての文明は基本的に『偉大な人間』に対して深い不安を抱いているが、ただ中国人のみが『偉人は万人の不幸』という諺で、この不安を白状している」²²⁾に由来し、マンはゲーテとナポレオン・ボナパルト (Napoléon Bonaparte, 1769-1821) とを暗示的に結びつけるために引用したと指摘されている²³⁾。ナポレオンに関しては、ゲーテとシャルロッテが再会する2年前まで、ヨーロッパにおいて対ナポレオン解放戦争 (1813～1814年) が行われていたことが想起される。また、この作品におけるゲーテに関しては、彼の周囲の人びとがいつも機嫌をうかがわなければならないような人物として描かれていて、シャルロッテを訪問したアデーレ・ショーペンハウアー (Adele Schopenhauer) によると、あるサロンにおいては暴君 (Tyran) のようだったとも書かれている²⁴⁾。

一方、招待客たちは「偉大な人物は社会の禍である」という中国の諺に対して、それが非常にばかげていると見なしていることを示すために爆笑する²⁵⁾。その理由は、彼らがゲーテのことを当然「偉大な人物」の一人と見なして、そのような人物が社会の禍になどなるはずはないと思っていることを示したかったから

20) ドーソン (1971: 94-95) を参照。

21) Vgl. Debon (1990: 159).

22) Nietzsche (1973: 524). 日本語訳は三島 (1981: 256).

23) Vgl. Frizen (2003: 737).

24) Vgl. Mann (2003: 139).

25) Vgl. Mann (2003: 411-412).

だろう。ゲーテはこの諺について、さらに次のように言う。

「もちろん、そういう言葉は私たちの地球儀に書かれている真理を裏書きする言葉としてはもちろん正しい言葉ではありません。そのような言葉の明白な反個人主義の点でシナ人とドイツ人とは似ているとは言えないからです。私たちドイツ人にとって個人は貴重なものです。——それはまた当然なことでもあって、私たちは個人として偉大であるからです」²⁶⁾

『ヴァイマルのロッテ』におけるゲーテは、中国人がドイツ人とは異なって「反個人主義 (Anti-Individualismus)」であると考えているようだ。この点に関しては、当時の清朝が「文字の獄」という言論・思想の弾圧をしたり、成人男性に対して辮髪を強制していたことと一致している。この作品におけるゲーテの中国・中国人に対するイメージは、「官僚登用試験の科挙を想起させる厳格な試験制度」と「反個人主義」である。

しかし、『ヴァイマルのロッテ』におけるゲーテの中国・中国人に対するこれらのイメージは、上述のエッカーマン『ゲーテとの対話』における実際のゲーテの中国像とは非常に異なっている。たとえば、1827年1月31日のエッカーマンとの対話において、実際のゲーテは中国人の特徴として「理性的」・「道徳的」・「自然との共存」等を挙げていて、否定的なことは述べていなかった。また、科挙を想起させる厳格な試験制度への言及も、エッカーマン『ゲーテとの対話』にはない。これに対して、『ヴァイマルのロッテ』におけるゲーテの中国・中国人に関する言及には、エッカーマンとの対話において実際のゲーテが称賛している中国文学だけではなく、シノワズリーのような中国文化に対するあこがれのイメージも見られない。

一方、この作品における中国像の特徴を明確にするためには、ゲーテだけではなくシャルロッテの抱く中国像も考察する必要があるだろう。シャルロッテに関してデボンは、彼女が「偉大な人物は社会の禍である」という中国の諺に対し、ゲーテが話した直後は「中国人の言うとおりで！」²⁷⁾と考えるが、その日の帰りの馬

26) Mann (2003: 413). 日本語訳は望月 (1971 下: 279).

27) Mann (2003: 412).

車のなかではもうこの判断を取り消したということだけ触れている²⁸⁾。ここでは、それ以外のシャルロッテの抱く中国像について考察したい。

シャルロッテは、ゲーテが中国の諺を紹介した直後に起きた招待客たちのやかましすぎる哄笑に不安を感じ、妖怪めいた幻影が浮かぶ。

多くの鐘をつるしたたくさんの屋根のある塔がつかなくなって、その塔の下でひどく賢い老練した人々が辮髪をたらし、漏斗のような帽子をかぶり、華美な色の上衣をつけ、両足をかかわるがわる地につけて跳びはね、爪を長くのばした痩せた二本の人差指をかかわるがわるにさし上げ、虫の鳴くような言葉でとどめを刺すような過激な不謹慎な真理を告げているのであった²⁹⁾。

シャルロッテの心に浮かんだ年老いた中国人たちの幻影は、「辮髪」・「漏斗のような帽子」など当時の清朝における男性の髪型や服装でいながら、「爪を長くのばした痩せた二本の人差指」や「虫の鳴くような言葉」などとグロテスクな姿で想像されている。また、「過激な不謹慎な真理を告げている」という箇所は、招待客たちのゲーテに対する過剰な追従の異常さを、これらの中国人たちが告発しているように思える。

さらにシャルロッテは、ゲーテの家で催された午餐会の帰りの馬車のなかでも、中国人について考える。

「彼 [ゲーテ] は偉大であって、あなた方 [リーデル夫妻] は善良な人たちです。しかし、わたしも善良なんです、ほんとうに心から善良で、そして、善良でありたいと考えているのです。善良な人間だけが偉大さを尊ぶことができるからです。鐘をつるした屋根の下で跳ねまわって囀っているシナ人たちは、馬鹿げた意地わるい人たちです」³⁰⁾ (括弧内筆者)

シャルロッテは、自身とリーデル夫妻 (シャルロッテの妹夫婦) は中国人と違っ

28) Vgl. Debon (1990: 162).

29) Mann (2003: 412). 日本語訳は望月 (1971 下: 278)。

30) Mann (2003: 427). 日本語訳は望月 (1971 下: 298)。

て、偉大さを尊ぶことができると考える。また、彼女は中国人について、「屋根の下で跳ねまわって囁っている」などと奇妙な振る舞いを想像するだけでなく、彼らの性格も「馬鹿げた意地わるい人たち」と思う。この場面でのシャルロッテは、中国人に対する軽蔑をあらわにしている。

そして『ヴァイマルのロッテ』の最後の第9章において、シャルロッテは1816年10月9日の観劇が終わった帰りの馬車のなかで出会った幻のゲーテに対し、中国人について次のように言う。

「シナ人たちも、ほかのことで奇妙な考え方をする民族でしょうが、わたしの姿を震える手でガラスの上へウェルテルの姿とならべて画いていますもの——ほかの誰の姿でもなく、このわたしの姿をです」³¹⁾

この台詞は、ゲーテの『ヴェネチアのエピグラム (Venezianische Epigramme)』(1790)の34番bにおける「中国人でさえもびくびくした手でウェルテルとロッテをガラスに描いたことは、私に何の助けになるだろう」³²⁾の箇所由来すると指摘されている³³⁾。しかし、シャルロッテは中国人について、「ほかのことで奇妙な考え方をする民族」と考えている。作中のゲーテも中国人の「反個人主義」の点を挙げて、彼らがドイツ人とは似ていないと述べているが、シャルロッテの中国人に対するイメージは、中国人の異質性をさらに強調しているように見える。また、彼女は中国人について「馬鹿げた意地わるい人たち」と思うなど、彼らを非常に蔑視する考えも示している。

『ヴァイマルのロッテ』のゲーテとシャルロッテの中国人に関する言及において、中国人の異質性が強調されているのはなぜだろうか。実際のゲーテは、エッカーマンとの対話において、自分たちドイツ人が中国人と同じ人間だと感じられると述べていた。したがって、『ヴァイマルのロッテ』において中国人の異質性が強調されていることは、実際のゲーテの特徴を表したのではなく、作者のマン自身から生まれたものではないだろうか。このことを確認するために、次に

31) Mann (2003: 442). 日本語訳は望月 (1971 下: 318-319)。

32) Goethe (1990: 132). 日本語訳は筆者。

33) Vgl. Frizen (2003: 776-777).

『ヴァイマルのロッテ』以前に発表されたマンの作品における中国・中国人に関する記述を見てみたい。

3.2. 『ヴァイマルのロッテ』以前に発表されたマンの作品における中国像

『ヴァイマルのロッテ』以前に発表されたマンの作品、たとえば長編小説『魔の山 (*Der Zauberberg*)』(1924) やエッセイ『ゲーテとトルストイ (*Goethe und Tolstoi*)』(1925) 等においても、中国・中国人に関する記述がいくつか見られる。それらの特徴を簡単に述べると³⁴⁾、まず中国の春秋戦国時代にいたとされる思想家の老子とその「無為自然」の思想に関する記述が比較的多い点が挙げられる。『魔の山』においては、主人公ハンス・カストルプ (*Hans Castorp*) の教育者のような役割をするイタリア人の文学者ロドヴィコ・セテムブリーニ (*Lodovico Settembrini*) が、「東邦は行動を嫌悪します。老子は、無為は天地間のあらゆるものよりも有益であると教え、すべての人間が行動することをやめたら、地上には完全な平和と幸福とが訪れるだろうと説いています」³⁵⁾ と言い、老子の「無為自然」の思想を根拠としてアジア人が行動を嫌悪すると断定している場面がある。セテムブリーニは、老子の思想をアジア人の特性と結びつけ、またこの思想を否定的に見ている。また、『ゲーテとトルストイ』では、マンはロシアの作家レフ・トルストイ (*Lew Tolstoi*, 1828-1910) が老子の教えを人々の前で説いている場面について言及し³⁶⁾、「説き手がトルストイでなかったならば、この教え [老子の教え] は一般にはきわめて貧弱な興味しか喚び起さなかったにちがいません」³⁷⁾ (括弧内筆者) と述べている。マンが老子の思想を、それほど評価していなかったことがうかがえる。

この他に、『魔の山』においては、中国・日本等の黄色人種の国家が欧米諸国にとって経済的・軍事的な脅威になるという 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて流布していた黄禍論 (*die gelbe Gefahr*) を想起させるような情景描写も見られる。たとえば、若い中国人男性がトランプゲームにおいて、ヨーロッパ人たちを相手

34) 高辻 (2022: 1-15) を参照。

35) Mann (2002a: 568-569). 日本語訳は関・望月 (1988a 下: 61)。

36) Vgl. Mann (2002b: 862-863).

37) Mann (2002b: 863). 日本語訳は山崎・高橋 (1992: 96)。

に笑いながら大金を勝ち取っていく場面³⁸⁾や、また特に中国を指してはいないが、セテムブリーニがハンス・カストルプに「アジアがわれわれを飲み込む」³⁹⁾と警告する場面がある。

『ヴァイマルのロッテ』に描かれている中国像とそれ以前に発表されたマンの作品に描かれている中国像を比較すると、異なる点が四つ挙げられる。まず第一に、老子とその「無為自然」の思想に関する記述が、『ヴァイマルのロッテ』において見られないことである。そして、異なる点として第二に、作中におけるゲーテとシャルロッテの中国・中国人に対するイメージには、黄禍論を想起させるような黄色人種に対する脅威が感じられないことも挙げられる。たとえば、シャルロッテが中国人を「馬鹿げた意地わるい人たち」と考えている場面などは、むしろ中国人に対する優越感がうかがえる。

また、異なる点として第三に、作中におけるゲーテとシャルロッテが中国人について言及する際に、ドイツ人と対比していることが挙げられる。たとえば、作中におけるゲーテは、中国人の特性として「反個人主義」の点を挙げる際にドイツ人と対比しているし、シャルロッテは「偉大さを尊ぶことができる」ことについて、自身およびリーデル夫妻(シャルロッテの妹夫婦)と中国人を対比している。この点は、『ヴァイマルのロッテ』以前に発表されたマンの作品の中国人に関する記述には見られない。たとえば、1918年に発表されたエッセイ『非政治的人間の考察 (Betrachtungen eines Unpolitischen)』において、「中国人のなかで、『偉大な人物は社会の禍である』という諺が生きている」⁴⁰⁾という記述があり、この諺は『ヴァイマルのロッテ』においてゲーテが招待客たちに紹介する諺と同じものだが、これに基づいて中国人とドイツ人を対比してはいない。また、『魔の山』においてセテムブリーニが老子の思想について言及するときには、ドイツ人ではなくヨーロッパ人の特性と対比している⁴¹⁾。

さらに、異なる点として第四に、作中におけるゲーテとシャルロッテの中国・中国人に対するイメージは、その異質性が強調されているように見えることが挙げられる。特にシャルロッテは、中国人について「奇妙な考え方をする民族」と

38) Vgl. Mann (2002a: 849).

39) Vgl. Mann (2002a: 366).

40) Mann (2009: 398). 日本語訳は筆者。

41) Vgl. Mann (2002a: 240, 568-569).

言ったり、「鐘をつるした屋根の下で跳ねまわって囀っているシナ人たち」などと中国人を奇妙なものとして思い描いている。もっとも、1924年に発表された『魔の山』においても、たとえば「シナでは空前絶後のきばつな文字崇拜がおこなわれていて、四万の漢字を墨で書けると元帥になれるそうである」⁴²⁾と中国における文字文化を強調する台詞や、また中国人男性の容貌を「黄色い顔に鼠のような目が真黒く糸のように光っていた」⁴³⁾などと非常にステレオタイプの黄色人種のイメージに描いている場面がある。しかし、マンは1922年10月15日にベルリンで行った講演『ドイツ共和国について (*Von Deutscher Republik*)』において、グスタフ・マーラー (Gustav Mahler, 1860-1911) の交響曲《大地の歌 (*Das Lied von der Erde*)》(1909) について「古代中国の抒情詩と最も発展した西洋の音楽とを融合して有機的人間的統一にした」⁴⁴⁾ことを例に挙げて、諸文化間に根本的な異質性が支配していることを否定している⁴⁵⁾。1939年に発表された『ヴァイマルのロッテ』以前の作品においても、マンは中国・中国人についてその異質性を表現しているが、『ヴァイマルのロッテ』におけるほどには強調していない。

4. 1930年代後半のマンの日記における中国に関する記述と日中戦争

『ヴァイマルのロッテ』において描かれている中国像は、シノワズリーにおける中国のイメージや実際のゲートの中国像とは非常に異なっているだけでなく、この作品以前に発表されたマンの作品における中国像と比較しても、いくつかの点で異なっていた。それでは、『ヴァイマルのロッテ』が執筆された時期(1936年11月～1939年10月)におけるマンの中国に対するイメージは、どのようなものだったのだろうか。この作品が執筆された1930年代後半におけるマンの中国像について、彼の日記を手がかりにして見ていきたい。

1936年2月26日付の日記には、日本で起きた二・二六事件に関する記述がある。この事件は、陸軍の皇道派青年将校らが国家改造を目指し、約1500人の部隊を率いて首相官邸などを襲撃したクーデター事件だった。

42) Mann (2002a: 790). 日本語訳は関・望月 (1988a 下: 312)。

43) Mann (2002a: 849). 日本語訳は関・望月 (1988a 下: 379)。

44) Mann (2002b: 548). 日本語訳は筆者。

45) Vgl. Mann (2002b: 548).

東京における軍部反乱の新聞、ラジオ報道、四人あるいは五人の大臣の殺害、現代最悪の特徴をもつ、「帝国主義的国民主義・社会主義」による権力掌握。どうやら議会を排除するばかりでなく、「秩序」を維持するかにみえる軍部のために、文民国家一般を排除するものらしい。中国とロシアは重大な不安を感じている⁴⁶⁾。

マンは「四人あるいは五人の大臣の殺害」と書いているが、この事件で殺害された大臣は斎藤實内大臣と高橋是清蔵相だった。また、「現代最悪の特徴をもつ、『帝国主義的国民主義・社会主義 (imperialistischen Nationalismus und Sozialismus)』による権力掌握」(括弧内筆者)という表現について池内は、マンが「ナチスの国民社会主義 (Nationalsozialismus) をパラフレーズして、双生児のような二つの国家を見てとった」⁴⁷⁾(括弧内筆者)と指摘している。日本はこの二・二六事件の後、軍部の政治的発言力が増大した。マンは軍国主義体制が強まっていく日本に対して、中国は非常に不安を感じていると書いている。実際、二・二六事件の半年後の同年8月に、日本は「第二次北支処理要綱」を策定し、華北五省(河北・山東・山西・チャハル・綏遠)を影響下に置くことを決定した。これに対して、中国では抗日救国運動が高揚し、同年12月の西安事件をきっかけに抗日戦線統一の動きが高まる⁴⁸⁾。そして翌1937年7月7日の盧溝橋事件に端を発して、日中戦争(1937～1945年)が始まった。マンは同年8月27日付の日記において、日本軍による上海の攻撃について言及している。戦争は、8月9日に日本海軍陸戦隊の大山勇夫中尉らが中国保安隊に射殺されるという事件を機に、上海にも拡大していた(第二次上海事変)。

上海のイギリス公使、車で走行中日本軍の航空機に銃撃され重傷を負う。旗を傷つけるな! 誇り高いイギリスはどうなったのか⁴⁹⁾。

日本の中国侵略に対するマンの怒りとイギリスの中国援助に対する願望が、こ

46) Mann (1978: 262). 日本語訳は森川 (1988b: 394)。

47) 池内 (2017: 42)。

48) 小林 (1998: 41-42) を参照。

49) Mann (1980: 95). 日本語訳は森川 (2000: 176)。

の記述にはうかがえる。また、日本がこの前年 1936 年 11 月にナチス・ドイツと日独防共協定を結んでいたことも、マンが日本に対して敵意をいだく要因となっただろう。彼は 1935 年 6 月 24 日付の日記に「ドイツと日本の友好関係が進んできていることについて新聞の報道、——十分に根拠があり、多くの災厄を生み出す可能性があるろう」⁵⁰⁾と書いているように、日本とナチス・ドイツとの接近を警戒していた。

日中戦争についてマンはその後、1938 年 4 月 18 日付の日記に「政治では、日本軍に対する中国軍の勝利」⁵¹⁾、また 1939 年 6 月 24 日付の日記に「アングロサクソン諸国を前に日本軍の部分的後退、しかし封鎖の継続、青島における緊張」⁵²⁾などのように経過を追っている。そして、1939 年 7 月 29 日付の日記に「新聞各紙にローズヴェルトによる対日通商条約の破棄通告が書き立てられている。東京の憤激、イギリスの安堵。中国戦争の妨害を引き続き狙って欲しいものだ」⁵³⁾と書いているように、マンは日本と戦争をしている中国を心配している。マンは『ヴァイマルのロッセ』を、この 3 か月後の同年 10 月 26 日に書き終えるが⁵⁴⁾、その後も 1942 年 5 月 31 日付の日記に「日本軍は中国軍に対して毒ガス作戦を展開し、成功を収めている」⁵⁵⁾、1943 年 5 月 23 日付の日記に「中国の日本軍が死活的な重要地域に対して大攻勢」⁵⁶⁾、また 1944 年 5 月 13 日付の日記に「中国における危険をはらんだ情勢」⁵⁷⁾などと書いているように、日中戦争の戦況に目を向けていた。

一方、この時期のマンの日記において、中国文化に関する記述を見ると、『魔の山』等 1920 年代前半に発表されたマンの作品で何度か言及されていた老子については、1933 年 8 月 24 日付の日記に「食後に老子の箴言集を読んだ」⁵⁸⁾と書かれている。しかし、老子の箴言について特に感想は書かれておらず、その後ナチ時代が終わる 1945 年までの日記にも老子は取り挙げられていない。また、中国

50) Mann (1978: 125). 日本語訳は森川 (1988b: 188)。

51) Mann (1980: 210). 日本語訳は森川 (2000: 354)。

52) Mann (1980: 425). 日本語訳は森川 (2000: 670)。

53) Mann (1980: 441). 日本語訳は森川 (2000: 694)。

54) Vgl. Mann (1980: 493).

55) Mann (1982: 437). 日本語訳は森川・横塚 (1995: 683)。

56) Mann (1982: 579). 日本語訳は森川・横塚 (1995: 913)。

57) Mann (1986: 55). 日本語訳は筆者。

58) Mann (1977: 158). 日本語訳は筆者。

文学に関しては、『ヴァイマルのロッテ』を執筆し始める半年前の1936年5月14日付の日記に、「フィッシャーで出たばかりの中国の小説を読む。面白かったが、いつまでも読み続けたくなくなるほどではない」⁵⁹⁾と書いている。この中国の小説は、クロード・デュ・ボワ＝レイモンによって中国語から翻訳された『鍾馗。斬鬼伝。第九才子書』で⁶⁰⁾、民間に広がっていた鍾馗に関する伝説について、金聖嘆(明末清初の文芸評論家)の「才子書」につらなるものという体裁で刊行されたものである⁶¹⁾。しかし、それ以降は、1940年2月7日付の日記に「しばらくして寝台に入り、中国の小説[日記の本文に欠落があるため作品名は不明⁶²⁾]を読み始める。呑み込みにくい用語の背景」⁶³⁾(括弧内筆者)と書かれるまで、中国文学は取り挙げられていない。

『ヴァイマルのロッテ』を執筆していた1930年代後半において、マンは中国に関しては、主として日中戦争の戦況に目を向けていたと言えるだろう。また、マンは1942年2月2日付の日記に「人間の数は多くても装備の悪い中国とロシアの大軍」⁶⁴⁾などと書いているように、中国の軍事力に対して頼りなさを感じていたようだ。この時期におけるマンの中国に対するイメージは、自分の国籍を剝奪したナチス・ドイツと接近する軍国主義の日本に侵略される弱国というものだったのではないだろうか。

5. 結び

トーマス・マンの『ヴァイマルのロッテ』における中国像について、まず17世紀から18世紀のヨーロッパで流行したシノワズリーや実際のゲーテの中国像と比較した。『ヴァイマルのロッテ』における中国像には、シノワズリーのような中国文化に対するあこがれのイメージは見られず、また実際のゲーテのように、ドイツ人と中国人との類似性を見いだしたり中国・中国人を称賛する性格もない。

そして、『ヴァイマルのロッテ』における中国像とそれ以前に発表されたマン

59) Mann (1978: 301). 日本語訳は森川 (1988b: 450).

60) Vgl. Mann (1978: 595).

61) マン (1988b: 451) を参照。

62) Vgl. Mann (1982: 699).

63) Mann (1982: 21). 日本語訳は森川・横塚 (1995: 47).

64) Mann (1982: 387). 日本語訳は森川・横塚 (1995: 601).

の作品における中国像との比較をし、異なる点をいくつか見た。それはまず、『ヴァイマルのロッテ』における中国・中国人に関する記述には、それ以前に発表されたマンの作品において何度か見られた老子の思想など中国文化に関するものがほとんど見られないことが挙げられる。この点に関しては、『ヴァイマルのロッテ』の執筆時期（1936年11月～1939年10月）におけるマンの日記において、中国文化に関する記述がほとんど見られないことと共通している。また、『ヴァイマルのロッテ』における中国・中国人に関する記述には、『魔の山』において見られた黄禍論を想起させるような黄色人種に対する脅威を感じさせるものもなく、むしろ中国人を蔑むような表現がいくつか見られた。そして、中国人の異質性がそれ以前に発表されたマンの作品に比べ強調されていて、その際ドイツ人との対比もされていた。

ユーリア・シェル（Julia Schöll）は、ナチス政権と対立してドイツから亡命するという特別な状況にあった当時のマンは、『ヴァイマルのロッテ』において「ドイツ的とは何か」という問いに取り組んでいると指摘している⁶⁵⁾。たとえば第7章において、作中のゲーテが「なぜならば、ドイツ精神とは自由、教養、普遍性、愛を意味していて——諸君〔ドイツ人〕がそれを知らないとしても、それによつてすこしもそれは変わらないのだ」⁶⁶⁾（括弧内筆者）と独白する場面がある。シェルのこの指摘を考慮に入れるならば、『ヴァイマルのロッテ』における中国・中国人に関する記述において、ドイツ人に対する中国人の異質性が強調されていることは、マンの「ドイツ的とは何か」という問いによって生まれた可能性がある。つまり、マンがこの作品において、ドイツ人の特性について考察するために、それと対比させるものとして中国・中国人のイメージを利用したということが考えられる。

一方、『ヴァイマルのロッテ』執筆時期のマンの日記における中国に関する記述を見ると、上述したように日中戦争に関するものが大部分だった。それらの記述には、日本に侵略される中国を心配するマンの気持ちがうかがえる。日中戦争は、最終的に1945年8月の日本のポツダム宣言受諾によって中国の勝利となるが、マンが『ヴァイマルのロッテ』を執筆していた1930年代後半においては、中国

65) Vgl. Schöll (2003: 143).

66) Mann (2003: 328). 日本語訳は望月（1971下：163）。

は劣勢だった。『ヴァイマルのロッテ』のなかの中国・中国人に関する記述において、黄禍論を想起させるような黄色人種に対する脅威を感じさせる記述が見られないのは、マンが日中戦争における中国の劣勢を知っていたからではないだろうか。

しかし、『ヴァイマルのロッテ』において異質性が強調され、時にはグロテスクに描かれたり蔑視される中国人を見ると、マンが日中戦争において中国を心配した理由は、中国・中国人に対する親近感からではなかったのではないかと思われる。おそらくマンが当時の中国を心配した主な理由は、『ヴァイマルのロッテ』を書き始めた1936年11月にナチス・ドイツと日独防共協定を結んだ日本が中国を支配し、それによってナチス・ドイツが有利になることを恐れたからではないだろうか。たとえば、1942年2月11日付の日記に「戦争に関して過度の悲観論。日本を盟主とする汎アジア体制はほとんど完成」⁶⁷⁾と書いているように、マンは日本によるアジアの侵略・支配を恐れていた。それゆえ当時のマンは、中国に対して、日本の侵略・支配を防ぐことができるかということをまず心配していたのではないだろうか。

参考文献

一次文献

Eckermann, Johann Peter (1986): *Johann Wolfgang Goethe Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens Münchner Ausgabe*. Bd. 19. Hrsg. von Heinz Schlaffer. München: Carl Hanser.

Goethe, Johann Wolfgang (1985): *Johann Wolfgang Goethe Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens Münchner Ausgabe*. Bd. 16. Hrsg. von Peter Sprengel. München: Carl Hanser.

Goethe, Johann Wolfgang (1990): *Johann Wolfgang Goethe Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens Münchner Ausgabe*. Bd. 3.2. Hrsg. von Hans J. Becker u. a. München: Carl Hanser.

Mann, Thomas (2003): *Thomas Mann Große kommentierte Frankfurter Ausgabe. Werke-Briefe-Tagebücher*. Bd. 9.1. Hrsg. von Werner Fritzen. Frankfurt am Main: Fischer.

67) Mann (1982: 391). 日本語訳は森川・横塚 (1995: 606)。

- Mann, Thomas (2002a): *Thomas Mann Große kommentierte Frankfurter Ausgabe. Werke-Briefe-Tagebücher*. Bd. 5.1. Hrsg. von Michael Neumann. Frankfurt am Main: Fischer.
- Mann, Thomas (2002b): *Thomas Mann Große kommentierte Frankfurter Ausgabe. Werke-Briefe-Tagebücher*. Bd. 15.1. Hrsg. von Hermann Kurzke. Frankfurt am Main: Fischer.
- Mann, Thomas (2009): *Thomas Mann Große kommentierte Frankfurter Ausgabe. Werke-Briefe-Tagebücher*. Bd. 13.1. Hrsg. von Hermann Kurzke. Frankfurt am Main: Fischer.
- Mann, Thomas (1977): *Tagebücher 1933-1934*. Hrsg. von Peter de Mendelssohn. Frankfurt am Main: Fischer.
- Mann, Thomas (1978): *Tagebücher 1935-1936*. Hrsg. von Peter de Mendelssohn. Frankfurt am Main: Fischer.
- Mann, Thomas (1980): *Tagebücher 1937-1939*. Hrsg. von Peter de Mendelssohn. Frankfurt am Main: Fischer.
- Mann, Thomas (1982): *Tagebücher 1940-1943*. Hrsg. von Peter de Mendelssohn. Frankfurt am Main: Fischer.
- Mann, Thomas (1986): *Tagebücher 1944-1946*. Hrsg. von Inge Jens. Frankfurt am Main: Fischer.
- Nietzsche, Friedrich Wilhelm (1973): *Nietzsche Werke*. Bd. 5.2. Hrsg. von Giorgio Colli und Mazzino Montinari. Berlin: Walter de Gruyter.
- エッカーマン (2012) 『ゲーテとの対話 (上) (中) (下)』 (山下肇訳) 岩波文庫。
- ゲーテ、ヨハン・ヴォルフガング (1997) 『詩と真実』 (山崎章甫訳) 岩波文庫。
- ニーチェ、フリードリヒ (1981) 『ニーチェ全集 12』 (三島憲一訳) 白水社。
- マン、トーマス (1971) 『ワイマルのロッテ (上) (下)』 (望月市恵訳) 岩波文庫。
- マン、トーマス (1988a) 『魔の山 (上) (下)』 (関泰祐・望月市恵訳) 岩波文庫。
- マン、トーマス (1985) 『トーマス・マン日記 1933-1934』 (岩田行一・浜川祥枝・森川俊夫訳) 紀伊國屋書店。
- マン、トーマス (1988b) 『トーマス・マン日記 1935-1936』 (森川俊夫訳) 紀伊國屋書店。

- マン、トーマス (2000) 『トーマス・マン日記 1937-1939』(森川俊夫訳) 紀伊國屋書店。
- マン、トーマス (1995) 『トーマス・マン日記 1940-1943』(森川俊夫・横塚祥隆訳) 紀伊國屋書店。
- マン、トーマス (2002) 『トーマス・マン日記 1944-1946』(森川俊夫・佐藤正樹・田中暁訳) 紀伊國屋書店。

二次文献

- Debon, Günther (1990): Thomas Mann und China. In: Eckhard Heftrich / Hans Wysling (Hrsg.): *Thomas Mann Jahrbuch Band 3*. Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann, S. 149-174.
- Frisen, Werner (2003): *Thomas Mann Große kommentierte Frankfurter Ausgabe. Werke-Briefe-Tagebücher*. Bd. 9.2. Hrsg. von Heinrich Detering u. a. Frankfurt am Main: Fischer.
- Schöll, Julia (2003): Goethe im Exil. Zur Dekonstruktion nationaler Mythen in Thomas Manns *Lotte in Weimar*. In: Thomas Sprecher / Ruprecht Wimmer (Hrsg.): *Thomas Mann Jahrbuch Band 16*. Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann, S. 141-158.
- 池内紀 (2017) 『闘う文豪とナチス・ドイツ —トーマス・マンの亡命日記』中公新書。
- 伊藤白 (2014) 『トーマス・マンの女性像 —自己像と他者イメージのあいだで』彩流社。
- 小林英夫 (1998) 『日本のアジア侵略』山川出版社。
- 高辻正久 (2022) 「第一次世界大戦後から 1920 年代前半におけるトーマス・マンの中国像」学習院大学ドイツ文学会『研究論集』第 26 号、1～19 ページ。
- 東田雅博 (2015) 『シノワズリーか、ジャポニスムか —西洋世界に与えた衝撃』中央公論新社。
- ドーソン、レイモンド (1971) 『ヨーロッパの中国文明観』(田中正美・三石善吉・末永国明訳) 大修館書店。
- 福田英男 (1981a) 「ゲーテと中国文学 (上)」東北学院大学文経法学会『東北学院大学論集』第 71 号、1～20 ページ。

福田英男（1981b）「ゲーテと中国文学（下）」東北学院大学文経法学会『東北学院大学論集』第72号、119～142ページ。

山口知三（1991）『ドイツを追われた人びと 一反ナチス亡命者の系譜』人文書院。
ラック、D・F（1987）「中国像の変容」平凡社『東方の知』、8～100ページ。

Das China-Bild in Thomas Manns Roman *Lotte in Weimar*

Thomas Manns Roman *Lotte in Weimar*, der im Jahre 1939 veröffentlicht wurde, thematisiert die Episode, dass Charlotte Kestner, die das Modell für die Figur der Lotte in *Die Leiden des jungen Werthers* (1774) war, im Jahre 1816 Johann Wolfgang von Goethe nach 44 Jahren in Weimar wiedersah. Damals war Goethe 67 Jahre alt. In diesem Roman gibt es einige Szenen, in denen Goethe und Charlotte China und Chinesen erwähnen. Vorher schrieb Mann auch darüber, u. a. in seinem Roman *Der Zauberberg* (1924) und seinem Essay *Goethe und Tolstoi* (1925). Aber im Vergleich dazu hat das China-Bild in *Lotte in Weimar* einen anderen Charakter. Beispielsweise wird in *Lotte in Weimar* die chinesische Fremdheit besonders betont. Auch wird Laotse, dessen Gedanken in *Der Zauberberg* und *Goethe und Tolstoi* erwähnt werden, hier nicht thematisiert. Ich betrachte das China-Bild in diesem Roman nicht nur unter dem Gesichtspunkt des Jahres 1816, sondern auch unter demjenigen der zweiten Hälfte der 1930er Jahre.

Was für Vorstellungen von China, die Goethes China-Bild beeinflussen konnten, gab es am Anfang des 19. Jahrhunderts in Deutschland? Im 17. und 18. Jahrhundert war die Chinoiserie in Mode in Europa. Die damaligen Europäer interessierten sich für die chinesischen Kunst wie zum Beispiel für Porzellan, Tapeten und Möbel. Die Chinoiserie beeinflusste auch die Literatur. Goethe schrieb in *Dichtung und Wahrheit*, dass er in seiner Universitätszeit chinesische Tapeten in seinem Haus verworfen hatte, worüber sich sein Vater ärgerte. Die Chinoiserie machte somit also keinen guten Eindruck auf den jungen Goethe. Johann Peter Eckermann schrieb in *Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens*, dass der 78-jährige Goethe einen chinesischen Roman *Die Geschichte vom Blumenpapier* in der englischen Übersetzung lobte. Nach Eckermann fühlte Goethe die Ähnlichkeit zwischen Deutschen und Chinesen, und außerdem hielt er der Charakter der Chinesen für klar, verständig und sittlich.

Reflektiert das China-Bild in *Lotte in Weimar* das China-Bild des wirklichen Goethe? Manns Goethe erklärt seinen Gästen, dass typisch für China die rigorose Prüfung bei

den Mandarinern und ein Anti-Individualismus seien. Dieses China-Bild hat jedoch keine Ähnlichkeit mit dem zeitgenössischen China-Bild der Goethe-Zeit. Weiter denkt Charlotte, dass die Chinesen alberne, böse Menschen seien und fremdartige Gesinnungen hegen würden. Ihr China-Bild ist abwertend. Somit ist in diesem China-Bild keine Sehnsucht nach der chinesischen Kultur zu entdecken, wie sie für die Chinoiserie kennzeichnend war.

Mann schrieb *Lotte in Weimar* vom November 1936 bis zum Oktober 1939. Wie war sein China-Bild in der zweiten Hälfte der 1930er Jahre? In diesem Zeitraum schrieb er mehrmals über den Zweiten japanisch-chinesischen Krieg in seinem Tagebuch. Er war über China beunruhigt, das von japanischen Truppen angegriffen wurde. Dagegen schrieb er sehr wenig über die chinesische Kultur in der zweiten Hälfte der 1930er Jahre in seinem Tagebuch. Während Mann *Lotte in Weimar* schrieb, dürfte sein Interesse an China hauptsächlich durch den Zweiten japanisch-chinesischen Krieg angeregt worden sein.

Das China-Bild in *Lotte in Weimar* hat drei Merkmale. Erstens gibt es wenig Beschreibungen über die chinesische Kultur in diesem Roman. Zweitens trägt dieses China-Bild keine bedrohlichen Züge wie es die Vorstellung der „gelben Gefahr“ war, die im *Der Zauberberg* auftauchte. In der zweiten Hälfte der 1930er Jahre hatte China gegen Japan den Krieg verloren. Deshalb könnte Mann damals vielleicht China für eine militärisch schwache Nation gehalten haben.

Und drittens betont das China-Bild in *Lotte in Weimar* die chinesische Fremdheit. Mann vergleicht dabei den Charakter der Chinesen mit dem Charakter der Deutschen. Er ging damals ins Exil, weil er in Opposition zum nationalsozialistischen Regime stand und thematisierte mehrmals das Deutschtum in *Lotte in Weimar*. Daher könnte er in diesem Roman auch die Chinesen mit den Deutschen kritisch verglichen haben. Und ich denke, dass der Grund, dass Mann sich damals über China beunruhigte, auf seiner Angst um die japanische Herrschaft über China beruht haben könnte, weil Japan damals mit Nazideutschland den Antikominternpakt geschlossen hatte.